

他に分類されないその他の製造業

人や企業の「個性」を彫り込む技能士の腕

7-34 公印堂印舗

一本一本手彫りにこだわる町の印鑑屋さん

長野県の飯田市で三代に渡って印鑑の製作・販売を行っている公印堂印舗のたたずまいは、いわゆる普通の「町のハンコ屋さん」といった趣である。しかし、店内に足を踏み入れると、陳列されている印鑑が他の店とは異なっていることに気づく。ガラスのショーケースに並べられているのは、象牙や水牛といった素材でできた印鑑である。値段も数万円のものが並ぶ。これらの印鑑にはまだ刻印はなされていない。

「実印などの高級な印鑑はお客さんの要望を聞いてから彫り始めるので、そういう状態なんですよ。」と三代目の桜井優氏は語る。

店舗は顧客対応に特化し、印鑑の製作は外注するという業者も増えてきている中、公印堂では製作から販売までを一貫して自分達で行うことで、顧客のニーズにあった印鑑を製作している。



公印堂印舗の外観

手作業にしか作り出せない印鑑本来の姿

桜井氏は大学卒業後、数年間東京の印鑑会社に勤務していた。その際、印章彫刻の講習会などに参加しており、その期間中に印章彫刻の技能検定に合格している。印鑑屋の二代目、三代目の職人が印鑑製作企業や専門学校で修行することは、業界では一般的なことだそうである。

「最近では機械製作の印鑑が市場に多く出回っています。でも、もともと印鑑というのはそれを持っている個人を特定するための道具ですから、データをインプットすれば全て同じように作れてしまうよう機械では逆に、印鑑に本来求められている機能を果たせないんです。」と印鑑本来の役割について語る桜井氏。手彫りであるがゆえの「揺らぎ」が一つ一つの印鑑には生まれる。そしてそれが個人の持ち物としての印鑑の価値となるのである。それができるのは機械ではなく、あくまでも技能士の腕である。

口コミによる評判が広がって顧客数が増加

公印堂印舗の印鑑の質は、桜井氏が技能士であることによって担保されている部分もあると同氏は語る。

「お客さんから見たら印鑑の良し悪しというのはなかなか分かりにくいものですよ。ましてや、それを作っている人が若ければ『大丈夫かな』と不安になってしまうこともあると思うんです。そういったときに、自分が技能士で技術があるということを説明すれば、お客さんに品質の高さを納得してもらうことができる。技能検定にはそういう良さがあると思います。」

確かに、1級技能士が作る印鑑ともなれば、安心して製作を依頼できそう。また、品質の高さが価格に反映されるということもあるのではないかと。しかし、実際はなかなかそうはいかないようである。

「技能士であることが、印鑑の価格の上昇につながることは無いですね。ただ、作り手や印鑑のことが口コミで広がっているのも、お客さんの数が増えているかもしれません。」

単価の上昇ではなく、顧客数の増加につながる。技能検定の経営上のメリットには、このような効果も期待できるようである。

顧客、自分の価値を見定めることの必要性

公印堂のように、顧客との対話を通してニーズを把握し、それを印鑑にしていくような昔ながらの印鑑屋は減ってきている。低価格の印鑑が文房具屋などの印鑑屋以外の業態でも販売されるようになってきた。

「消費者の選択肢が広がってきているという意味では、悪いことではないと思います。でも、そういう状況の中で自分の作る印鑑がどのようなお客さんに選んでもらえるのか、どのように差別化をしていかなければならないか、それをもっと真剣に考えなければならぬ時代になってきていると思います。」決して追い風とは言えない状況下で、自分の作る印鑑の価値を冷静に見つめることがこれからは必要になってきているのだ。

公印堂印舗

- 業種：他に分類されないその他の製造業（印章彫刻制作・販売）
- 設立：昭和16年
- 住所：長野県飯田市
- 従業員：3名
- 代表者：桜井勉
- 技能士：2名

技能士へのインタビュー

桜井 優氏 (40 歳)

1 級印章彫刻技能士 (木口彫刻作業・ゴム印彫刻作業)



「家業だから継ぐのが当然…」から技能グランプリ優勝への過程

桜井氏が受検した「印章彫刻」の技能検定は、象牙や水牛、石、木材といった素材に印章彫刻を彫り込む「木口」と呼ばれる作業と、ゴムの表面に同じく印章彫刻を彫り込む「ゴム印」という作業とに分かれる。桜井氏は東京で技能を磨く中で、その両方に合格している。

その技量と姿勢を評価され、第 22 回から技能グランプリに出場し、ついに平成 21 年第 25 回大会では第一位の成績を収めている。そんな桜井氏だが、社会に出る頃は、別段印鑑業にまい進していく気持ちをそれほど持っていなかったと振り返る。

「まあ家業だから継ぐのが当然かな…という程度の認識だったんですよ。大学を卒業してから印鑑の会社に入りましたが、印鑑について本格的に勉強するかどうか、という部分はまだ漠然としていました。でも、その会社で販売担当として、店頭で顧客対応をする中で、このままだと印鑑の 1 つも彫れないぞと考えて、それで団体が主催している定期講習会に行き腕を磨こうと思うようになりました。」

講習会は、習熟度に応じて初等・中等・高等とカリキュラムが別れており、高等を修習した職人は研究科でさらに技能を研鑽することができる。桜井氏も研究科に進み、その課程を修了した後も月に一回は東京で聴講生として講習会に参加している。

自主的な勉強会の成果を技能検定で試す

桜井氏が進むことになった印章彫刻の道。その道について、桜井氏は「終わりが無いですねえ。」と表現する。

「一生かけたって、自分の満足のいく水準までいけるかどうか分からないですよ。」

技能グランプリ優勝者をして、このような発言をさせる印章彫刻の世界とは、一体どのような世界なのか。試みに桜井氏が技能グランプリで製作した印鑑を見せてもらった。

「ゴム印の表面に彫り込む『線』が評価の決め手になります。同じような線に『揃える』。



桜井氏が手掛けた
ゴム印

それができないと他の選手には勝てません。」

また、印章彫刻では彫り込む前に、彫刻刀を研ぐことが実は重要なのだそうである。「ゴム印は特に、これでもかというぐらい彫刻刀を研いでおかないと、自分の思ったとおりに彫ることができないんですよ。実はこの研ぎというのが、一番重要なのかもしれません。」

検定や技能グランプリで外の世界との接点を作る

技能グランプリでの優勝経験や、各種 1 級技能検定の合格は、技能士としての桜井氏にどのようなメリットをもたらしているのだろうか。

「やはり、自分の自信につながるというのがありますね。自分がここまでできるんだということで、仕事に高いモチベーションを持って臨むことができていると思います。それと、技能グランプリに出場することで、他の印章彫刻の選手や、長野選手団の他職種の技能士さん達と知り合えたのもいい経験になったと思います。」

桜井氏と話していると、業界や、自分が手掛ける印鑑を差別化していくことへの視線の鋭さを感じる。これは、技能グランプリへの出場や講習会への出席など、頻繁に飯田市の外の世界とのつながりを持っていること、自分の腕への自信といったものから来ているのかもしれない。

回り道をしなければ見えてこないもの

最後に若手に対するご意見をうかがった。

「機械による印鑑製作が多くなっていますが、自分の手で実際に印鑑を作るという一見回り道をする事で、自分の中に新しい視点が生まれてきたり、印鑑の良し悪しが分かるようになってきたりしてくるものです。印鑑を見定める眼力は、自分の腕によって培われる側面もある。そこを分かって欲しいと思いますね。それと、自分の印鑑の良さについて、これからは技能士自身が語らなければならない時代になってきていると思います。黙っていても分かってくれる、という世の中ではなくなっていますから。」冷静に自分のポジションを見つめる桜井氏の姿勢は印章彫刻に限らず、全ての若手に参考になるのではないだろうか。